

特 107

682

選 詩 名 界 世

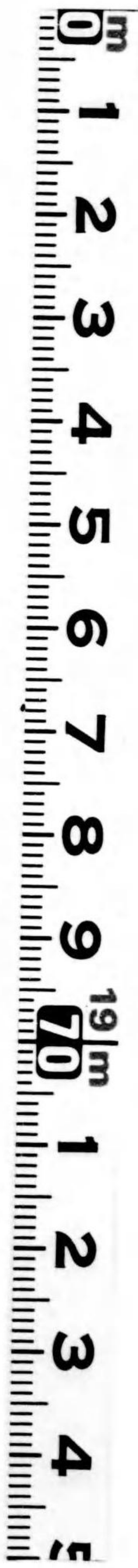
(I)

集 詩 ギ イ テ



澤 米

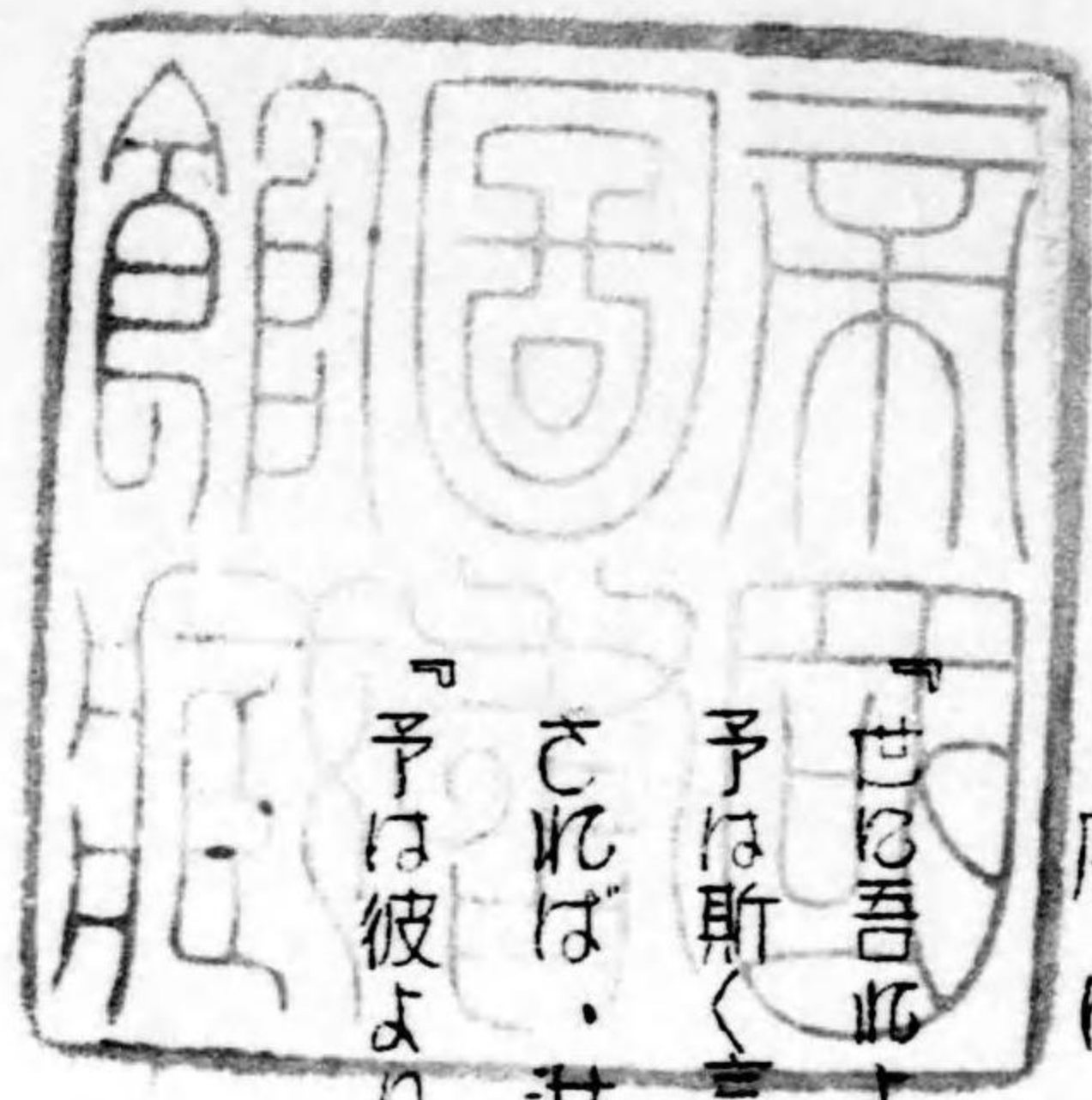
社 詩 ま づ あ



始



特107
682



序をか入て

『世は言はれども正しき言はぬ』云々

予は斯く言ふを恥ぢず

と云はば、汝を以て言はぬのみ

『予は彼よりも正しかりき』云々

ルウソウのサンゴ・葉より

大正
15. 9. 22
内交

何れの国の人なるを問はず。
苦しみ闘ひ遂には勝つべき。
ありゆる自由なる魂に捧ぐ。

ロマン・ローラン

詩に

世の中は

多くの人の踏石として

ありよき生活を築く人が

随分と数多いといふことだ

だが私は

私の詩を踏石として

よりよき生活を築くのだ

蔓草

『彼女は俺を棄てた奴

美しい顔や姿で誘惑しやがって

散々俺を褶ひやかつた後は

また何処かに男を末のてあるんぼらうけねど

俺は彼女を見付け出して

八裂の刑に陥れてやりなまこやならん』と

カトリック原始教の神祿が言ひやかつた

『こら!!カトリックの男共

罪を裁いちやならない

こら!!カトリックの女共

罪を犯してはならない』と

キリストのいふ神の子供が言ひやかつた

『可して馬鹿な奴等だ

エスラエルの弱虫共よ

俺の言ふことを従へ

俺は全智全能の神だ』と

ローマの法王が言ひやかつた

『こら!!ローマの暴君共

黙らなのか!!

貴族達は土斯古人に亡ぼされて了へ』と

いつをルーテルは焼き殺されをけねど

向もなく新約聖書の并は伸びた

『こら!!蔓つてある毒草共

枯れて了へ!!

こら辱れてある雑草共

面を洗へ!!』

赤い太陽

連は囁合つて居た

細い緑葉の繁が春風にゆれて

自然の花園には甘い芳香がたゞよつてゐた

午ユーリップの精や蜂鳥の精達が

笑つたり唄つたり舞つたりしてゐた

花の数も鳥の数も余りに多く

瓣の姿も翼の姿も余りに美しいので

私は唯言葉もなく微笑んで立つて居た

そしてらう一茎の花が私に近づいて来て

『一緒に遊びませう』と手を伸べて呉れた

私は『ありがたう』と答えて

静つかに花を抱きしめた

いつもさうした楽しみを繰返すのが

其の日ばかりは忘れられない
蜂鳥は私で

午ユーリップの花は少女であつた

二人は恍惚として眠り……………声立てゝ泣き

感謝の涙に押し流されたのも意識せずには

『悲でもなく『愛』でもなかつたので

私達は名を呼ばなかつた

顔や姿にさへ見覚えがなないのでから

希望の瞳を上げて見る眺は

虹よりも大きく太陽よりも強く遠方は輝いてゐた

赤い太陽の光は永遠のシンボルであつたろうか

連は囁合つて居たけれど

細い緑葉の繁が

温暖な夏雨の王を宿して

キラキラに光を放つてはあたりねど

天の楽 には一片の紅も落ちてはあらず

黄色の絹の小羽さえ舞つてはあなかつた

蜂鳥の歌も聞えず

チューリップの葉も芳香つてはあなかつた

赤い太陽は輝いてあたりねど

灰色の積雲の中に眠つてゐるのではなしか

鳥は飛んであたりねど

山の彼方は消えて行くのではなしか

如何したのさふのぼらう

世界は沈黙の夏を眠つてゐるのであらうか

——否——否——花も小鳥も

晩秋の収穫期までの労働を

わざのも振りすは急いであるのだ

さうして春の歡喜を得た少女の姿は

さうして少女の肉は根を踏下して

日々は成長しゆく靈の一個は

けねども私の蜂鳥は凡てををすね

静かな夜の星で語り……………靈は潤ひ

心よき夢の船舷は戯ね

また明日の太陽を待つことしようか

流れ行く影

煮えはざる浴爐の中には

鐵骨の一縷はなつて失せてゆく労働者の郡が泣いてゐる

火は毒蛇の舌の様に赤赤と燃え
 幾万の労働者を入吞にしてゐる地獄の釜は
 黄金の液に揺ろいであは
 それは楽しい春の陽炎のように美しくかつた
 それは私共に取りての大きな誘惑である
 蛇は追ひつめられ蛙が
 自ら蛇の口中に飛び込んでゆくように
 それは怪しげな魔法使の法術とさえある
 催眠術の術中に陥つた労働者の群は
 強烈な酒精の空瓶を嘆きながら
 天地を裂く大地震の渦巻の中で
 凄惨な死者の凱歌を唄つてゐるのは
 機械は轟々たる響と共は

凡ゆる者の生を灰色の翼に包み
 迷宮の夜闇は運んで行く——
 ……それを行はのは
 もしも再び帰ればなり……あゝ若しも……
 死者はお前達に語るだらうけれど
 ……不化の近道をねえ……
 あゝ夜闇の路は暗く
 暁の間の朝霧を望む黎明は遠く
 夜は今過ぎ去りし夕べには戻らない
 お前達、生きてゐる労働者よ
 夜を知れ!!……夜を……

凌辱せられたる女の花體

大学病院の陰惨な解剖室には
 先刻凌辱されて絞殺された
 女の死體が黄色い布の端に曝されてある
 彼女は若い美しい妻であつたけれど
 夫の留守に

かねて知り合ふ男は情交を強要され
 それを拒絶し反抗した為は

小さい日本間の壁の中で
 白い手は刀も無く

屠殺された兎の様に
 敢果なき残骸をこゝのたのた

そして彼女は無惨にも荒鷲の手は凌辱されたのだ
 乱れた襟に纏る乳房の指紋がそれを現前に證してある

夫は泣いてゐる

自動車は肉を食つた獣のように呻いてゐる
 犬の様に鼻をうごめかし

猫のようは目を光りしてある刑事の冷笑
 薄気味悪い笑顔を浮べて死女の肉に迫る

地獄の赤鬼や青鬼共は
 腰に灰色の甕を提げ

手に金屬製のフォークを持って
 眼に千倍の毒眼鏡を懸けた医師達が

若い人妻の肉體を……硬つた血の塊を
 陰のものの中より探すのだ

物質的友情

君の爲めを!!
 札の爲めは……………
 そら注作・杯を傾けて
 縁の泡が笑つてる
 そら飲め・これも君の爲め
 物質的反情の凡てを撒散らひし
 陶然として芽香る花汁の甘きさなかな
 唇突き入れし蜂と蝶
 笑ひさざめき交し合ふ
 いざ汲め・これも若き日の
 生命の糧の泉ぞや

生の帰還

歌は

泉しき時の笑であり
 悲しき朧の涙である
 祈禱も然り
 酒も然りき
 生も …… 死も
 まはは病も …… 勉強も
 神秘を包む運命も
 なべて吾等が現前の
 思想の畑に生えし草樹
 より大いなる生命は
 大地の母に還り来ん
 こぞ汝が生命なる

慕心

野に咲く花の優美さは
 花笑ふのたゆめならず
 蝶々の姿恋なれば
 夕への雨も恋なるぞ
 少女の途に行暮れて
 月におもひを哀ましの
 汝が心のうるほひは
 葉赤に光る霧ならん
 いとひそやかほしめやかに
 寄する生命の波見すや
 かさくく鳴る風さえも

こきに吾等が足を止む
 けは思出のかづおほく
 まは憧憬のこころおほし
 さればせば……
 いましごこそ寄りぬ方よく
 寄りてまに去るはよし
 聞け・尚まどりてきこの歌節の
 ほがらかに清く流るゝ水玉は
 見よ・光ともなく注ぎ来て

争ひ

酒宴乱れて
 争ひ起きぬ

吾れも怒りて拳を振れば
 女未りて手を握り
 『叔るし給へ』と泣きたりし
 女は敵の妹よ
 彼は酒乱に身を崩し
 あたり閑はずいさかえど
 彼女は優和な心にて
 兄の無暴を気づかひぬ
 さても椽の不思議なる
 神カミ女メと悪魔アクマのあつりよ

奥羽の春

肉慾の柵越え

大鳥の翼ひろげて
 歡喜は未る

君よ 知らずや
 奥羽の里に
 春陽おこづれ
 百花の笑ふ

三浦の秋

火は追はれ
 都を出でし嬬シメ女の
 心に閑く曼珠沙華マンジュシャウ

編笠山の山陰に

黄昏迫る頃どかや

夢に声なく慕ひ穿る

舞姫の妙枝に葉は落ちて

紅に染りし其裳に

夕陽をみし曼珠沙華

武の言田には

亜米利加の巨倉モルガン唄

『日は・ひねもす

夜は・よもすがり

砲火閃き……爆弾轟く

劍激磨して……龍車は進む

武装嚴めし日本の国よ

けにも貴女の本国には

整備せる軍器の如何に立然たることよ』

日本の旗・洋傘が時空をこえて唄ふ。

『おや・まあ貴方は真正にお利功坊うやんね

あんなにも美しかつたお頭髮がすつかり白く変つたのよ

それも雪白にはなしは・灰色にたわ

そして一本一本は数えることが出来てよ

だつて、抜けるんですもの

鐵の溶けた地獄の焰の赤々と

火は燃える

土の底なる幾方の血と肉とに

そり!! 吸血鬼が笑つてゐる
 魔天閣の荷針計が呻きながら 狂ひながら
 飛行機よ……飛行機が……あゝ危険だ!!
 大西洋が渦巻いて……それから世界へなんてはっね
 電気ハンマーの響音の中に
 築つかねゆく富は種より高い
 整備せる榮光の地に昔ねかりず
 お国の豆米州加は不思議な国ね』

聖母崇拜論の

ギリシヤの舞を唱ふ

『東ローマが滅亡した時
 アテネの城の姫君は』

小さく御手を胸に當て
 南の空に涙しぬ
 父母は死し
 兄弟は斃れて唯一人……
 其時ですの、貴方のような立派な騎士がね
 群がる敵兵を蹴散りして

姫君、もう大丈夫です
 さあ確り抱つこして……立かないで……
 私ですよ
 ロマヌスよ

戦に敗れ

国は亡びなげね

わつぱり姫は女王でしなの。そして

やつぱり騎士は皇帝でしなの

ゆえ……さうぢやあなかつて

妾は貴方の……そして

貴方は妾のよ。』

フロートメントの言葉

『なるほど聖母崇拜の理由が解つた

雄蜂みだいな政洲中古紀の青年達よ

東の山の森林に

ギリシヤの姫が泣いてある

土斯古の蛮族兵に追はれた三國一の美女が、お前を待つてある

救助の騎士をね

さあ、早く進んで連れ出して

お前の女王にするんだよ

すりやあお前は王様だ。』

ギリシヤの姫の言葉

『もう止ませう。悪戯は罪よ

日本の文学者で帆足理一郎つていふ方ね

すつかり本気にしちまつて

お姫様と聖母を取違えてあるわよ

無理でなわけ、でも……でも……

今時、お姫様なんか居ないんださの

京都の街を離れて月に

琴こいのいでて彈す花は
 爪手ふるふや惣天田
 哀れや笛に誘はれて
 小督こゝろ打碎け
 君が小袖に泣き沈しぬ
 けにも日本の美娘は
 小さな胸を紅に染め
 大宮人を慕ふ哉

ねえ貴方

人間つて何故こんな馬鹿なことで
 随分笑可しいぢやあなの
 男達が女王をね 聖母を

そして女達が宮人を恋してゐるのだから

フロートレスの詩集等にて

『七百年以前の思想を其儘に

亜細亜も……………

欧羅巴も……………

同じ老を恋してゐるんだ

三千年以前の罪惡を其儘に

亜細亜も……………

欧羅巴も……………

同じ鬨を闘つてゐるんだ

舊約聖書の神祕も

新約聖書の神々も

全世界に築造る八百万の神々も

こり!!貴族達は何と云ふ悪の塊共だ

こり!!貴族達は何と云ふ嘘つき共だ

老 爺

敵を捕へて其敵を

自分の娘に娶合して

産此の子供を喰むこり

今、南米の密林に

斯かる争実の在る世哉

年老いたる其親を

樹に昇りして振り落し

弱れる老爺を殺すとか

今、北米の山中に

斯かる争実の在る世哉

坂めぬ老者や病者には

僅づかばかりの食糧を

与へて棄つる遊放の

今、中亞細亞の砂原に

斯かる争実の在る世哉

年老いたる其親は

家に寶の山を積み

若き婦女子を母として
酒の至るは日を送る

今、皇国の権門に
斯かる争実の在る世哉

苦を積む

一の力量を

十の力量を

そして一の知識を

十の知識の所有者に

あゝ如何に優ぐ此なる汝に与えりるゝ樂しき歡喜

天の幸福……地の榮光……無限の富よ

此こそ吾等が汝より受くる樂しき至宝

山よりも高く海よりも深き

げに碧空の悠久に似て靜づかに

星よりも美しき華花の瓣

月よりも清く覚ゆる澄める水

あゝ、燃ゆる火玉のそれよりも

輝き渡る生命の如何に麗しき太陽

でもね、でも社会はさうしませんよ

だから……だから幾等働いても

酬はるゝの幸福を感じ得ぬ人々に

積まるゝ生の数兎や

……金銀……乳香……眞珠……など

如何に積めども満たぬ物質多し

さねど無窮の空のほど高く

語りぬ海底の深かければ
空は塵よ 塵は惨舌の紙屑よ
なるほどな
解りかけにぞ

沈黙への星

日本の男を死なせりかたに

『春が来て
森に小鳥が唄つては
野辺に草薺が笑つては
その時私の胸からも
いろんな花が笑ひ出す
そのとき私の小窓に雀も

老の草葉は葉を造り
いろんな歌を唄ひます』

不レネキの女を唄つて

『オホ……、まあ笑可しな嘘らしい歌ね
でも、お国の日本では真正なのでせう

風よ吹け

熱い風よ

雨よ降れ

涼しい雨よ

いつも夏なる太陽の下に
いつも夏なる緑葉の上に

エスキモーの小男を唄つて

『嘘ばかり言つてゐるあ

雪よ降れ

海水よ凍れ

寒く凍く

いつも冬なる水の中に

晝と夜との極国に

地球の端まで、語る

皆んな間違つてありあ

皆んな嘘言つてありあ

紅い太陽

白い月

私は黙つて回轉する星に

老父の兄弟

女。「透々 産れましむよ」

男。「何れが……」

女。「赤坊よ」

男。「さうか、大切に育て上げるが好い」

女。「亦、産れてよ」

男。「何れが……」

女。「赤坊よ」

男。「さうか、大切に育て上げるが好い」

女。「亦、産れてよ」

男。「何れが……」

女。「赤坊よ」

男。『さうか、土の中に埋めて置け』

女。『亦、産ねてよ』

男。『何だか』

女。『赤坊よ』

男。『さうか土の中に埋めて置け』

光波エーテルに

星から星へ

太陽から太陽へ

量り知ることの出せない力に

憶い量ることの出せない速度をもつて

明るく晝も

暗い夜も

風の朝も 雨の夕も……

幾万歳の古から

幾万歳の後までも……無窮に……

流れ行く一つの生命がある

何んな物體だろう……？

どんな生物だろう……？

太陽の様な火の王か、または

彗星のような光の叢か……または

俺達の住んである地球みたいな人間の巢か

否？それは人間の眼では到底も認められぬ程に小さな

バクテリア菌の幾千万分の一つしかない光線の王

その光線を幾千万分かした不思議なエーテルの波だ

さて、吾々の瞳に映ずる光線の集團は
 何と云ふ驚異的な美しさであるだらうか
 それにも優れて沈黙の波は亦、吾等にとりて
 何と云ふ素的な誘惑だらう
 太陽も……地球も……月も……星も……
 それ等凡てを包む、宇宙も……空間も……
 この小さなエーテル波のエネルギーに依つて
 この微生物の流動と運命を共にしてゐるのであらうか
 私には解りない
 神秘でももあるのか
 さて私は此の生物を捕えて
 物理学の実験室で
 電波と・熱波と・光波と・紫外線と・

X波と・長い・短い・エーテルの光波と、
 それらの生物を鉛板に透射したり

X波は唯の半吋を

そして短いエーテルの光波は六吋を通過するに過ぎなかつた
 私の思想の池に湛えられてゐる靈魂も

此のエーテル光波と同じなのだ

それは到底も人間の力では考へられぬ

口で語れぬ

筆に書けぬことなのだ

けれどもエーテルのエーテルなる以上

けれども人間の人間なる以上

私は他人に依つて生長するものでもなければ
 他人の花車の上に輝く光の子供でもない

私の詩も……藝術も……

それは私にこりて完全な生霊ではない

それは泡立つ岸辺の波に寫つた私の変映だ

それは私の化物だ

化物は決して本體と同じ姿を現はしはしない

本體は常に離れた場所に潜んである

その本體こそは私自身なのだ

悪人の夢

悪人の夢を見た

不景気と、貧困と、

病氣勝ちな私を棄て、

悪い都に去つて行つた

美しい悪人の夢を見た

去年と同じ処せらしい姿で

「輝子さんではないか……？」

私は真正に嫉しかつた

けれども彼女は

うつむいたまゝ、何んにも言はずに

顔に友禪染の長振袖を当てたまゝ、

急いで去つて行つて了つた

やっぱり彼女は……

あゝ、やっぱり……

女のこころなんか忘れることだ
強く生きなければならぬと思つて
書を読み、詩を書くけれど
少しもうすらかなら

……初巻の傷跡……

二時まで

『餘りに

何時までも

起きてゐてはならぬ』の

伯母が言ふ

『身體の毒ではあるし

不經濟だし

何んともなりぬることだ』の

義姉が言ふ

働らかなければならぬ

……俺は働いて来た

毎日十で時間〇〇……

……十四ヶ年の間を……

しかし俺は悪くまねなかつた

……病で……

……貧で……

薬を買ふ金さえない

『病體には安眠が一番の薬だ』と知りながら

……でも眠りたない夜には

詩を書くことが一番の楽しみだ

階下の柱時計が二時を報じてある

叔父の家

私は叔父の家を訪問した

叔父は喜んで迎えて呉れた

そして上品な叔母は

色々親切に話して呉れた

私は舞から水澤への遠い遠い一人旅の途中

二十二年の間かつて見知らなかつた此の家は

姉に連れられて訪問したのだつた

それから美しい娘さんは

美しいピアノの前に坐つて

小鳥の歌を唄つて呉れた

その時わたしの胸からは

幼い折の花んでろつたあの父と

楽しい放浪の旅を續けたことや

生別してある母の思出が

泉の花と咲き出した

私は立派な部屋の壁に向つて

なにも言えずに泣きだした

七月の晝は暑かつたけれど
夜の東京は美しい

風は海から吹いて来て

森に木の葉がゆれてゐた

そして此の二階建の灯はゆりのうて

夜鶯の涼しい声が

英吉利の初夏を思はせるように

音楽のリズムに和してゐた

春の夕べのそのまゝに……

あゝ、けれども……けれども……

何時までも此の楽しさが續いたら

私は神に感謝したらうもの

叔母に書生が私語してゐた

それは如何なることだらう……？

大学王であるといふ、そして

叔母の親しい孤兒であるといふ

書生さんが私に言つた

『もう、お乾麻になつたり……』

時計は十時を過ぎてゐた

私は書生部屋に連れて行かれた

そこには古びた机と古びた椅子が

水枯期をそのままに思はする様な

暗い十燭燈の下に眠つてゐた

何かが闇で、何てか無粧飾で殺風景で

寂しい部屋であるを食小屋の

のやな臭ひのする或張の下の
硬の床に私は眠りこけた

翌年私は横須賀に移住したので

度々この叔父の家を訪問してはねど

私は何も語りなかつた

私は何も食べなかつた

そして爪呂にも入りず

泊りもしなかつた

叔父も・叔母も・そして美しい娘も

いつしも私を歓迎して呉れた

『千鶴子は此の三月学校を了へたの

そして『書生』三郎さんだね

あの方も学校を了つてお嫁さんをもりつて

大坂の会社に買はれて行つたの

それから……………主人はね

海軍大学の教頭に榮轉したのよ

あゝ、妾は幸福だ

何故つて……………主人はね……………吃度

海軍大將になるの、そして妾は……………

あゝ、妾は幸福だ

千鶴子に立派な夫を選んてやねは……………

そんなことを話したり

そんなことを理想として居りつじやる体な

顔付や目付をして居りつじやる

私の叔父は海軍少將でした

そして私は……あ、私は……
私は海軍水兵でしたっけ

叔母は女中に自分の娘を

『お嬢様……お嬢様……』つて放へてみたが
牛鶴子も……お君も……

まだ十八の可愛い、娘さんでした

雲雀

悪人と二人で暮らさう

たゞ二人きりで……

親達に虐げられた小雲雀は

そんなことを考へてゐた

淡紅色の幸福を包んだ彼女の小さな胸にも

斯うした歡喜の希望は積されてあることばかりの

心がて期待の實現さるゝ日は……

花園の中の小さな屋根下は

出勤後の天を想ふ遺瀨なことが

沁々に沁々と感じらるゝであらう

あ、汝の若き日に愛する者と語らうタイムの

あ、いかに少女過るることよ

いつも針はこぶ手を止めて想ふ夫の身を

爪に草葉のよそぐ時

悲しき人の幼よ

いかなれば斯く母が幼き胸を惱し給ふや

.....

さねて圓りかなる日和の夢は破れぬ

軒下に這ふ蛇の誘惑か？ありぬ.....

吾が胸に狂ふ弾じられぬ立琴の絃よ

霧の如く・光の如く・夜の如く・

無数の波光は来る

今にし思ふ無限の靈よ

ゆけ.....ゆけ.....汝の本然に

.....母のふところにて.....父なる響の大全に.....

X 星

何故に

傾てあるかは知らないけれど

少しばかり斜になつて回轉してある地球

何故に

満潮や乾潮が起るかは解つてゐても

地球の傾てゐる理由は誰にも解らない

太陽を中心と泉句の楕に回つてゐる地球

けれど地球の自轉に依る赤道線は

太陽を向いて回つてはゐない

月と

太陽と

X星

それこそは月と地球と太陽とを従へて
 翼を獲けて飛んである天の王様か
 そんなことは解らないけれど

もつと大きな星が在るのかも知れない

そして、ひよつこしたら

地球の奴!! 黙つてあやがる

太陽の沈む時

先刻までは半島の山々をオレンジ色に照らしてゐた太陽
 先刻までは海峡の雲を梅花の袂に彩つてゐた夕暮

先刻までは金沙のようにはキラキラ輝いてゐた連

音も無く、静やかに、急速に……と、突然に……

今の風が羅沙の襟を替つて浸んで来る

夕べの姿は早稲の影に追はれて遠く去つてゐる

崩れ落ちた防波堤のコンクリートは今の

ひたひたに奇する足下の潮に 滾るる私は

泣きつて向岸の灯に吸はれて行く難破船だ

紅に染つて沈ぶみゆく晝の太陽も

私は解らないけれど……強い……

夜の空界に遠い大きな星を慕つて回轉するのだ

夜の精は青い翼を広げて飛んでゐた

沼の水底には青と赤との星の群が小砂と一緒に遶らぬ
 黄金の雪……白銀の雨……美しい花園の
 冬と春との間に降る結婚式場の飾輪花
 けれどもお鏡台でらんちやな天使の小娘は
 朝になつて羽衣の置場を忘れにことゝ気が付いた

白い濃霧は橙々色に染つて来た

東雲の空は強い光線に活動期の 功迫を告げに

海の色……陸の色……なつかしい思出の色々花

魚鱗の輝を放射する大海の巨鯨天空の船

赤道線の酒に酔つて海中に轉落した水天の夢が

「救助して呉れ……」といふ自分の声花

春

楽しい春がやつて来て

いろいろな花が咲きだした

いろいろな小鳥が歌つてる

いろいろな雨芽が伸びてゆく

楽しい春がやつて来て

積つた雪の消ゆるとき

湿つた土の乾くとき

私の乾いた胸からも

愛の泉が流れ出る

遠い昔の夢からも

老の哀歌が流れる

楽しい春がやつて来て

柳に燕が飛んでゐる

軒端に雀が睦んでゐる

けれども私の紅い老

何を慕ふて泣くのやう

楽しい春がやつて来て

白い雪やタンポポが

去年の夏を呼んでゐる

紅の密蜂、青の蝶

けれども私の其反は

去年の春のやうな花よ

海水浴場

白い麻織の天幕

赤い布を巻いた柱の下の

新らしい杓のたぐよふ杉板の上に

人間の巢が蠢めいてゐる

脱ぎ棄てられた男女の衣服

積み重ねられた清地の色は

どこから見ても

散らばつた人間の骸骨だ

太陽は輝いてゐる

海は大きく揺れてゐた

波は躍る

囁く波よ

きも若きも

波打際で穴を掘る

またうつて来た

崩れ懸る善波、白馬のいなゝき

龍騎兵の襲撃は跡形もなく

破壊されたバトロンの祭を

悟んでゐるのか否………！否！！

子供達は手を舉げて遊ぶ

のくりでも………あ、…幾等でも

男も女も皆んな裸體だ

老人も小供も皆んな裸體だ

裸體のお光

あの夜の月は青かった

あの夜の戶外は荒れてゐた

あ、私の老人は処女でした

あ、私の老人は処女うやうやしい

一昨年の秋でした

庭園には萩が咲いてゐた

草葉に虫が鳴らしてゐた

あ、私の老人は処女でした

ブラタースの葉が散つた

紅葉は見頃の色である

望月精美は蛇なのか

あゝ、私の恋人は処女でして

波は大きくゆれてあは

船の進路は解りぬけれど

星の仇敵を撃たぬはなりなら

あゝ、私の恋人は処女でして

私は船に乗組んで

望月精美を縛り上げ

標艦のあ光を殺さんぞ

あゝ、私の恋人は処女でして

嵐

嵐が起ると私は帰しい

麥の穂、蓮華の花は折れ

栗の実、林檎の果は落ちる

親父が走つて屋根は飛ぶ

嵐が起ると私は帰しい

黒い帆は帆綱が断られて

波は私を天までもちあげ

海は小舟を呑込んで了ふ

嵐が起るこ私は嬉しい
 雨々は自然の弓を引き
 森は荒々しい歌を唄ふ
 そして獣が吠え狂ふの夜

嵐が起るこ私は嬉しい
 灯は消え家は動くので
 皆んな戶外に飛出して不安気を語り合ふ
 『如何にしよう……如何にしよう……』

嵐が起るこ私は嬉しい
 怖れるのは金持ばかりだ
 悲しむのは弱の女共だけだ

驚くことは皆んな公平だ

蛸の墨汁

花の静けさに似て

生物の息はぬ暗黙世界がある

鮮紅……黄金……の色美し珊瑚の園よ

お、平和の海よ

太陽の光線が兩脚のように……九極光のように……

緑と黄金の絹を織る我の綾よ

吾が目撃がす壮美……壯觀……壯麗……

風が吹いてあるのか

珊瑚の園の旗うごき

あれ見よ 風が……潮流が……

緑色の魚鱗が岩盤に集つてゐる
なほをおひえてゐる

波に嘯く白銀の木の葉よ

お、初めて見る踏の姿……悪魔の影……

ドイツの骸骨軍が

弱のベルギーの民衆は毒瓦斯を浴び懸けるように

大きな目を輝かし

異様な足を張りながら

雷神の煙を巻き起こうとするのだ

お前はブルジョアだ!! 主裁者だ!!

お前の墨汁が小魚の目を盲にする

そしてお前は、弱の吾々を餌食にしよつてゐるんだナ

フロリダの海だ!!

……黄金の園花!!

小野小町

園花は花がほほつてた

春の夕べの櫻見で

小町の花は笑つてた

その時小町は十七の

美しい美しい娘でし

月はおぼろに霞んでた

花は夜目にも美しい

花見る人の其の中に

一際目立つて優麗なる

深草少将は美男子でしに

美しい男女の合合は

奇蹟に似せて星は飛ぶ

主を想ふ待女の心のうちりしさよ

『文、書きませ』と観せられ

花の中に月は入る

少将の胸は波さねぎ

筆もつ右手はふるえてに

『あ、もしも……もしも……』

お前は私のこの巻を

愛の涙で洗ふなり

あ、私は生きられなら

けれど、もしも……もしも……

お前が私のこの巻を

巻の畑に植ゆるなら

私は花を待ちませう』

行女の手紙を讀んでとき

小町は顔を紅に染め

小鳥はいろんな歌を唄つてに

そのとき小町の胸からも

あつゝの涙が流れ出に

「まあ、ほんじに……ほんじに……
 妾の貴方を慕ふ心は

貴方の愛より深いのよ

あなたの手より熱いのよ

でも、此は……

妾は泣かすに居らねたの

そねは口では語らねたの

ふみに居書けならこのまのよ

ねえ、少将様……

……しましはし……しましはし……

お待ろ遊ばせ

ねえ、こひし……こひしの少将様よ

妾の願望の此の花を

愛の畑に植えて給はせ

凡に月日の追はることも

櫻花は春を待ちませう

……こひしの少将様よ

月はあなたの姿に浮き

蝶はあなたの笛に舞ふ

操を奏えずに……永久に……」

「私はお前の手紙を読むと

いつも斯うして泣かされるのだよ

あゝ、私の小町よ……恋人よ……
 お前の心と純情はお前の顔より美しい
 私は今日も泣かされた

わたしはおまへの文を見ると

胸の惱も痛も消えてしまふ

さて、お前も十九だね

ふたごお前の春以末

二人は如何に愛し合つたことだらう

お前が希望んだ花園に

わたしの植えた芍薬が

見事に咲いてゐるでせう

けれども私は坂のなり

戸外には雨が降つてゐる

斯うして秋も更けてゆき

紅葉の色も絶えてゆく

でも『妾は貴方を愛します』と、お前が言った

わたしは泣がすにあらねな

今もおまへの夢を見た

私は例の芍薬を

あの花畑に植えてゐた

数へて見たら九百株だつた

もう残りの百株で

愛のこゝろ愛の凡てをおくるの元

それはどんなに楽しい夜の

あの夜鶯イサギの歌となり

私は廻るのをそこへ

こひしいお前の影絵を眺めてゐた

その映奪は二年前のお前そのままに美しかつた

けれども……あゝ、けれども……

私の病気は治らぬ

星は青い大空に

キラキラ光つて動かない

お前はそれを知るまいね

そしておまへは

この兼草の心が変つたのだと思つて

どんなに悔ひ悲しんでゐることか

でもお前は……愛するお前は……

それを赦して呉れるだらうね

おゝ、太陽よ……鳩よ……泉よ……

樹よ……草よ……花よ……旅業よ……

わたしの目は見えなくなつた

わたしの耳は聞えなくなつた

そして私は語れなくなつてしまつた』

そこには静かな月影をあびて
 白い花の咲き包ふ園がある
 さうして綺麗な芍薬の花たちは
 その夜も眠らないで待つてゐた
 けれども……あ、けれども……

その次の夜も恋しい人は未なかつた
 その次の夜も……次の夜も……

『どうしてなのでせうね……』
 恋のいたみを胸に抱き
 刀もいまは折れ折れぬ

小町は待々の顔を見て

黙つて花に物を言ふ

するこ芍薬の花は魁の顔に

『泣いてはけません、泣いてはけません、』と
 永の物語りを放へて呉れ元の

『あ、慕はしの少将様よ

あなたを愛は永遠の彼方に

キラキラ輝く星でせう

辛はあなたを忘れません

あなたを辛の鳥に花んだのです

二人の身に恋の花は開かなかつたけれど
 胸は清い清い愛の泉が流れてゐて

淡紅色の蕾が出来てゐた

ねえ、少将様……

妾は貴方の妻ですもの……

『思ひつゝぬねぼやんの見えつらさ』

『夢ご知りせばさめごりましを』

『ウツホ轉寐に恋しき人を見てしより』

『夢てふものは頼みそめてき』

『うごせめて恋しきときほめはたまの』

『夜の衣を返してぞ着る』

『現にはさもこそあらの夢にさえ』

『人目を守るとみるがわびしさ』

『限りなき思ひのまゝに夜も来む』

『夢路をさえに入は咎めじ』

『夢路には足をやすめす通えども』

『現に一目見しこともあらず』

『少将様……』

『恋しし……恋しし少将様……』

『都の花は笑つてよ』

『いつも見てありつしつるわね』

空の彼方のあのお星椛が

小町は京都に参りましたのよ
でも芍薬の花は咲かないわ

遠い北国の

あのなつかしい出羽の里には
まだ冷い雪が積つてあますの

母は毎夜あなたの夢を自まつすの

夢が醒めるご悲しいわ

でもまた眠る時には

訖度あなたの夢を見るように

神椛にお祈りするの

……あ、神椛……

もしも神椛が此の世にお出でなしたら

……あ、神椛……

あなたを……あなたを……

もう還つては下さりなす星椛ね

『色見えでうつろふものは世の中ウ』

入の心の花をぞありける』

『花の色はうつりにけりなりをうつら
わが身世にふるながめせしまに』

『わびぬれば身を浮草の根をたえて
誘ふ水ありばいなむごぞおもふ』

少将様……………

恋しい……………恋しい少将様……………

また花が散つてゆきますの

皆んな変つてゆきますの

誓ひも、言葉もつまりなものね

言葉は真正はあごのなり煙ですもの

皆んな嘘の誓をするんだわ

男の心なんか解りないんだもの

女の心の解りないようね

でも神様は見ておらつしやるわ

少将様……………

恋しい……………恋しい少将様

母もすつかり年老いてしましましたの

そして世間の人は母を

『馬鹿だ、馬鹿だ』とさひますの

今日も『文屋康秀』といふ方が来て

世間はおまへの噂して

ひごく性格のよくなの女だといふ

ごうだおまへ、俺と様になつて

三河の国に行かなのか！つて言ふの

で、妻も答えて言ひましたの
 『そんなことを考へることもある』つて
 ねえ、妻の老しい少將様……………
 世間が如何な悪口を叩いても
 貴方だけは妻の真正の心を

それから世間の人の悪口の意味を
 知悉してあて下さるわね

そして吃度感謝して下さいわね

それで好いので、それで小町は満足までござりますの
 じよ、じよ、我儘をし、怒っております

馬鹿な蛙共の無駄口ではないので……………

手琴の楽句

時代は進む……………星は流れる……………

吾々が小供の折に初めて手にした珍りしき楽番

名を大正琴と稱え黒と白との發りしこ鍵圓に

のたのけな指の觸る、毎に鳴り響く妙音は

『軍艦マーチ』壯麗烈気な躍動であつた

国を讀め君に思はる『君が代』の平和であつた

時代は進む……………星は流れる……………

鉄を賣く名刀正宗の中に

二月の花ならぬ水鉛の交りを知りぬ日本人も

ドイツが産める火焰の王に……………燃ゆる渦巻に

古き形骸を出でなき世界に往かんと
天と地と……主と従との……早差別を絶したり

時代は進む……星は流れる……

今の子供の手遊びに

黒い塗柄の銀の籠ふねは妙なる樂の音を

自から唄ふ手琴の句を聞けば

神と佛が、ララ、ラ……メロデーだ

父と娘が、チチ、チ……リズムだ

筆は泣く

白紙の前に

泣きつゝも筆持つ心の苦悶を

医すべきことの望みなき吾れに

虐げられつゝも自由を

心歌える温和な響を

二々年以前の闇に面くことは

此の痛める小さは胸に

たぐ一つの惱である

絶望の底を踏み、静づかなる

瞑想の苦行に耽らばつと、永年の間

操りしそれ等の物思ひや浮かびぬ

また、忽然として失せてゆくことの

おゝ、破壊されたる女の霊に

再び永遠の若さを有つた
 平静に歡喜して宴は此ゆく
 生の不滅を信する歸ひの来るは何時

壓せらるゝ者の靈は

暴虐の惨忍に自己づけり此つゝ、
 より熱き練獄の火に浴爐の苦を積み
 より強き太陽の光に接せんとして昇る
 されど吾れは打鳴らすべきの鐘なく
 望み求むべきの燈火

淡き仄かなる影の哀れに

吾れ歩む空気の波動に消ゆるもの

嗚呼、苦は増しぬ、闇の闇よ

エルテルの訴に

悉に破れにエルテルが

涙ながらに物語る

聽いて下され野の花はよ

私は永のこと

ロッセを愛して慕ふにが

花は私を愛したにが

泉は谷に流れたにが

ロッセは黙つて目を閉じて

涙をほら／＼落したにが

聽いて下されエルテル称よ

存し貴方を愛するが
 幸は貴方の妻がやなの
 想ひは水に流してよ
 泣きし少女の悲しさに
 立ち居ぬべき方なく
 あゝ、ロッチは私の妻がやなの
 斯くてロッチと私は
 愛しながらに別れたが
 聽いて下さぬ野の花達よ
 ロッチは愛なき其夫に
 何ぞ残骸を興へてよ
 でもそれは何んと呼ぶ
 身は靈魂の上にある

靈の自由の確保をえ

そが花の萌れて跡もなし
 花粉は飛んで陽に光る
 肉の自由な殿堂に
 靈もて築く利己の国
 見よ、人類の愚は并む
 ロッチの生れに其時は
 両親は国の法律に従ひて
 神の王座に約したるが
 靈の自由な殿堂に
 肉もて築く婚家の園に
 見よ、闇雲の花は咲く
 『花はエーテルは

人の心の響であり

晝夜を区別せぬ光であるが

それは紫外線の強力な光波に刺激され
眩惑されて燦々しながら

この嚴肅な必然に挑みかゝつてゐる』

『よし・解つた』と裁判官が言つた

『專らり・夫なる男女には

必然に依つて死の苦みこを與へらる』

『主よ・何故なりや』と民衆が

『それは四十年以来の出未事の尻を掌る

悪と善との凡てである』と教えられた

『それは何時の日なりや』と民衆が

『それは二十一世紀である』と必然が叫んだ

湖上の花

香が赤花ので縁が燃えて

常盤櫛は紅の衣を脱いでゐる

湖水は美しく光つてゐる

此処は湖畔の別荘地

おまへは美しく柔和で

それに氣質も好いが

私の心は少しも解つてゐないね

そんなことは如何でも好いのだが

女学生は紅の葎の籠を持つて

讚美歌を唄つて載れてゐる
おまへは惻愴で聰明で
私の心も理解してゐて呉れる

雁の来る頃

湖上には青の月の光がぼぼよつてゐる
私は小舟を漕ぎ出し
黒の翼の夜の木蔭が行つてゐる水底に

汽車は去つたつきり還らなりの夜
あの白い指は垂れてゐる黄金輪も
なつかしい思い出の数々も
今は遠くに去つてゆく

始なる眼女兒

太陽をも見ぬ嬰兒は
たゞ現なる目を閉ぎ
仄てを知れるそ霧の
うるみし瞳君見すや
こそ、始めにて終りなる

生を汝に知ることは
汝に花をは放ふこと
こそ、罪惡の始めなる
立證・辯護・觀念、と

友を得・選み・愛するは
 世に生をば強要るこゝ
 見よ・愛を得し其外に
 愛なき他人のいと多く
 見よ・友を得し其外に
 友なき友のいと多し

太陽

吾が汝を愛するは
 何れ太陽の如くなる
 されば汝に吾が愛を
 止むるこゝの初ぞなし
 如何に汝が切願ふとも

赤の夕陽は落ちてゆく
 もしも汝が吾が愛を
 小さき胸に抱くなり
 大地の草樹は枯れて了ふ
 雨降る夏日の多く
 汝の吾れを愛するは
 かの太陽を止めんこと
 止め得たりと思ふなり
 見よ・野に花の咲く時は
 吾と汝の地は遠く
 たゞなつかしの風吹きて
 汝と吾れとを結び交ふ
 げに愛の字の其意義は

自由の上へのみ眞実なれ
友・父母・兄妹・国家の愛
または神の愛・天地の愛さえも
吾等が愛を較らぶれば
自由の前に劣るなる

反抗

反抗は

反抗は

限りなき反抗は

反抗のみが吾々の生命は
生命を活かす泉は

泉は味く白蓮は

服従してはならぬ

瞬時も服従してはならぬ

服従は奴隷は

宗教に抗へ

富に抗へ

貧に抗へよ

而して、智識に抗へよ

キリストの

ユダヤ教に抗へる如くは

ルーテルの

ローマ教に抗へるが如くに

反抗だ

反抗だ

限りなき反抗だ

恋愛の悲劇

性な巳に近き異性の宙を

燃ゆる火粉の雨を降りし

想は遠き南の空で

春雪よりも淡い花を咲かする

而も此の不思議なるあやつりこそは

人類のみに與えられし『恋愛』であり
恋愛上の悲劇であつた

レヨコだ

過去の人間が引掻き合つた卵の上を

レヨコよ・何時まで腰を下してゐるのだ

おまへの過去に圓い卵を産んだ人間は一人も居ないのだ

レヨコよ・何時まで昔の歌を唄つてゐるのだ

おまへの過去に美しい歌を唄つた人間は一人も居ないのだ

書後

有島武郎と大杉栄とを私は愛する。

ゲーテもキリストも共に私の友ではなひか。

私は貴方を愛する。貴方は私を愛して呉れるであらう。
私は、それを信じ。

そして、貴方に感謝しよう。

凡ての兄弟に……凡ての姉妹に……

此後、発行される幾十集の「詩」を愛して下さる方に
私は斯う申上げます

刷 印 日二十月八年五十正大
行 発 日五十月八年五十正大



選 詩 名 界 世

編 一 第 集 詩 今 伊 テ ・ ラ ム ト

(銭 拾 五 價 配)

今 伊 テ ・ ラ ム ト

兼 作 著
者 行 発

元 八 二 三 町 春 市 沢 米
藏 芳 川 小

者 刷 印

所 元 発
町 表 市 澤 米
社 詩 ま つ あ

終

